啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出（アザリング）の政治（下）

── 世界の再分割と人種論の顕現 ──

李　　孝　徳

9. 人種的差異と解剖学

啓蒙期の黒人に対する認識についてはこの後あらためて論じるが，とりあえずこのフォルスターの議論でさらに触れておきたいのは，人間の差異を動物（猿）との連続性において論じる際，ザミュエル・トーマス・フォン・ゼメリングとペトルス・カンパーの議論に言及していることである（Forster 1786=1983: 162-3）。ゼメリングは人種の判定に解剖学を持ち込んだドイツの解剖学者で（人間の脳神経が 12 対であることを明らかにしたことで知られる），1784 年にムーア人（黒人と同じ意味で使われた）を解剖して骨格（特に頭蓋骨）をヨーロッパ人と比較し，「ムーア人とヨーロッパ人の身体的差異について」（Sömmerring［1784］2001）という論文を発表した。ゼメリングは論文の冒頭で「人間という玉座につきながらも，ムーア人を比較的低い階梯に位置させるように思われる何らかの差異，確実かつ特定のまったくの偶然ではない区別が，身体の構造と組織のなかにあるかどうか」を調査することが目的だと宣言し，一般的にムーア人は「ヨーロッパ人よりもサル類の境界近くに位置しているという結論は，正当にして根拠があるように思われる。しかし，ムーア人はそれでもなお人間なのであり，真正の四足動物よりもはるかに上位に位置し，そうした動物とは非常に明白な差異をもち，分け隔てられている」[1] という所見を披露した。

ケルン大学アフリカ研究所のアフリカ研究者であるマリアンヌ・ベックハウス＝ゲルストによれば，当時ドイツ・カッセルのヴィルヘルムスヘーエには，フリードリヒ 2 世の命によってアフリカ人を研究するために，アフリカから来た宮廷ムーア人とアメリカから連れてこられたアフリカ人奴隷によって 50 人ほどの「ムーア・コロニー」が形成されていたのだが，ゼメリングはそこから遺体を入手して解剖し，本論文を書いたのだという（Bechhaus-Gerst 2011）。ベックハウス＝ゲルストはゼメリングの解剖所見がゼメリングの黒人に対する先入見をただ確認する操作的なものであることを示唆しているが，頭骨の形態分析による人種的特徴の定量化という試み自体は，ドイツ人医師フランツ・ヨーゼフ・ガルが 19 世紀初頭に始めた骨相学（頭脳測定学）を先取りしており，人種の差異を気候や環境などの

外因によるものとせず，身体の内在的な問題として定量化をはかるものだった。つまり（科学的な信憑性はまったくないが）人種の決定プロセスを見た目（外貌）に基づく恣意的な分類から形質の定量的な分析に転換したことで，人種を生物学的（生理学的）な問題に変え，人間と動物（猿）が同じ霊長類（Primates）であることを前提に，人種の差異を動物（猿）との差異に延長する道を開いた。いわばある特定の人種（race）がヒト（Homo Sapience）の範疇に入るかどうかを定量的な分析の俎上にのせることが可能になったのだった。

また，カンパーはオランダの美術解剖学者で，ゼメリングはカンパーのもとでデッサンを学び，解剖学の講義を聴講しており，カンパーの顔面角理論についての著作を 1792 年にドイツ語に翻訳した[2)]。またゼメリングがカッセルのコレギウム・カロリヌム解剖学教授に任用されたのはフォルスターの斡旋によるもので，フォルスターがゼメリングやカンパーを引用しているのは 3 人に緊密な関係があったことにもよるが（森 2015: 250），それ以上にこうした解剖学が人間に関する新たな知見をもたらす科学として認知されていたことが大きいだろう[3)]。実際カンパーが提示した顔面角理論は，当時においてはヨーロッパの至上性を科学的に実証するものとしてそれ以後の人間科学に大きな影響を与えた。顔面角理論とは，人間の額の水平軸からの角度（顔面角）を測定し，顔面角をもとに眼，口，鼻，耳などの位置を調整することで「人種」を描き分けられるとする理論である（Camper 1792=2012）。実はこの顔面角，人間に限らず，犬から猿，アフリカ人，アメリカ人，アジア人を経て，ヨーロッパ人に至るまで段階的に種別化されている（ヨーロッパ人に近づくほど顔面角は大きくなる）というのがカンパーの理論だった。カンパーの著作を翻訳している森によれば，「カンパー自身は黒人に対する差別的な偏見をもっていたのではないことがわかる。皮膚の色に対する差別を否定し，黒人，褐色人，白人は同一の『人種』であって，皮膚の色は種類の差異にすぎないと断言して」いる一方，「顔面角を計測することで最高の美を体現する古代ギリシア人の末裔たるヨーロッパ人を筆頭に諸民族を美醜の階梯に位置づけ，黒人をオランウータンと同列に置いている」（森 2015: 247-8）。カンパー自身には黒人に対する直接的な偏見はなかったのかもしれないが，古典古代以来ヨーロッパには身体の美しさと精神の高貴さは対応するという心身観が根強くあったことを想い起こすならば，カンパーは黒人が人間として劣位にあることを動物（猿）との連続性において実証してみせたことになる（先述したフォルスターが人間と猿の連続性を述べる際にカンパーを引き合いに出したのはこの点によっていよう）。いわば当時の博物学者やフィロゾフの多くが持っていたヨーロッパを中心とした文明の地政学的な階梯的あり方を人間（動物）の身体の数値化を通じて定量化したことになる。

実はこうした人種的差異を解剖学的に論じることは 17 世紀に始まっていた。黒人の肌の色の黒さは皮膚組織（クチクラの外側）の色によることが解剖学的に明らかにされ，その黒さの原因が種々に考察されていた（Curran 2011: 121）。ドイツの解剖学者でゲッティンゲ

ン大学の教授であったヨハン・フリードリヒ・メッケルはその議論に転回をもたらした。メッケルは 1753 年にドイツの貴族に仕えていた 12 歳のアフリカ人少年の遺体を解剖して，その解剖所見がフランスの科学雑誌に「黒人の脳の髄質における色彩の多様性について」（Meckel 1755）という論文として掲載された[4)]。メッケルはその論文で黒人は脳が（ヨーロッパ人に比べると）規格を外れた形態で，黒いのは皮膚だけでなく，身体の諸部分はヨーロッパ人とは異なる色素を持ち，暗く，青みがかっていると述べ，その特殊な色の髄質が黒人一般に認められるとすると，それが黒人の体質に顕れている可能性があると論じた。さらにメッケルは 2 年後にもアフリカ人の解剖を行なって，黒人は内部構造の点でほとんど別種の人間を形成していると示唆した（Meckel 1757: 71）。

メッケルのこの発見と仮説はすぐにフランスとドイツで受け入れられた。多くの解剖学者や博物学者が長年抱いてきた，黒人は白人と比べてひどく限られた認識能力しかないという（ヨーロッパ中心主義的で差別的な偏見でしかない）“実感”を客観的に説明する証拠が得られたと考えられたからだった。こうして人種的差異（ニグロの劣等性）は生物としての生理に内在するものだという考えが広がり，先述したゼメリングの解剖へとつながっていった（Curran 2011: 124）。つまり黒人を黒人たらしめているのは，日焼けの定着や強い日差しへの耐性といった環境に起因するとされたその皮膚（外貌）ではなく，本質的（生物学的）属性であり，黒い肌はその本質的属性が身体に顕現した表徴でしかない。生物学（生理学）的性質を分析的に調べて客観的データを得ることで，人間を人種に分類できるという実証的手続きが“発見”されたのだった。

その意味で，メッケルの解剖学的観点から人種的差異を考察するアプローチは，ほぼ同じ時期に提示されたビュフォンの人種論とは根本的に異なっていた。ビュフォンの「人類の変異」は，科学的人種主義の嚆矢とされることがあるものの，内容的には諸民族の地理分布と特徴を蒐集した文献と事物の外貌に基づいて（主観的に）マッピングする生物地理学だった。諸人種・諸民族を単一起源として系統的に捉えようとする観点はあったが，その人種的差異・民族的差異は基準がはっきりせず，行われているのは主観的な人為分類であって，分類の普遍性を担保する本質的属性を見出すことで成立する自然分類ではなかったし，内在的に人間の差異を分析・比較して法則性を見出して新たな対象に拡張するような今日で言う科学的（仮説演繹的）観点はなかった。その認識的枠組みは伝統的な世界観（アリストテレスに代表される古典古代の文献，聖書，存在の連鎖）に則ったもので，大航海以来流入し続ける新しい世界の情報を既存の体系を更新しつつ包摂する人為分類としての画期性はあったものの，結局は博物学にとどまるもので，決して近代的な意味での科学に至ってはいなかった。

先述したモーペルテュイやカントにしても，発生論や生理学的な観点は認められるものの，やはり伝統的な地誌に依拠して，ヨーロッパを中心に据えた諸民族の空間的配置を説明する「分類」問題としての思弁であって，人間それ自体の内在的な構造・構成から分析する実証

的な観点は存在しなかった。なるほどカントは皮膚を重要な呼吸器官と見なして肌の色に基づく系統的な人種分類を行っており，ある意味で生物学的・生理学的な観点を持ち込んではいるが，呼吸器官と肌の色と人間の種族（Rasse）がどのような関係にあるのかは科学的（生物学・生理学的）に説明されておらず，その設定はあくまでも先験的な判断による思弁（皮膚は呼吸に関わる重要な器官だから，特定の人間集団（種族）ごとに色が違っているのは生物学的に意味があり，そうであれば人間は肌の色で種族に下位分類できる）であって，その肌の色も種族もその識別は恣意的で定量的でも定性的でもなかった。つまりビュフォン，モーペルテュイ，カントらの人種に関する研究の画期性は，いわ伝統的な世界観の中で行われた博物学的思考にもとづく思弁的な「成果」にほかならなかった。こうした博物学的人種論は 19 世紀以降も継続するものの，実際には 19 世紀に発展する生理学・生物学的な思考のもとで衰退していった。

10. 人種の審美性

先にカンパーの美術解剖学に触れたが，その審美性の規範である古代ギリシアの美が理想化されたのは，18 世紀半ばにヨーロッパを席巻した新古典主義の影響があった。よく知られているように，新古典主義の理論的支柱であったドイツの美術史家ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンは『ギリシア芸術模倣論』（Winckelmann 1755=1976）や『古代美術史』（Winckelmann 1764=2001）を通じて，当時流行していたバロック，ロココ様式を否定して古代ギリシアの芸術を理想とし，ヨーロッパ中心主義的な美術史を作り上げた。ギリシア彫刻に見られる人間の造形こそが美の極北であり，その白い肌は身体の見栄えを一層美しくするとして，肌の白さが鑽仰された（Winckelmann 1764=2001: 122）。そしてこの「肌の白さ」を基準とする美意識はドイツを起点に欧米に広がっていくことになった（Fredrickson 2002: 59）。前述したカンパーが顔面角理論に着手したのも，このヴィンケルマン美学を批判的に定式化しようとしたからであった（Camper 1792=2012: XlV）。啓蒙期後半の人種論に皮膚の色の白さが形質的な徴というより人間的な価値として記述されていくのは，このヴィンケルマン美学の影響が多分にあっただろう。なお，啓蒙期の知識人らしく芸術を論じるには作品の実見が肝要だとしたヴィンケルマンだったが，自らの理論の礎としたギリシア彫刻は，実は（真っ白な）イタリア大理石を使って模造されたコピーでしかなく，実際のギリシア彫刻は肌の色が浅黒く彩色されていたのだが，ヴィンケルマンはそのことを知ってもむしろ彩色は野蛮な反芸術的な行為だとしてその事実を顧みることはなかった（Painter 2010: 61）。

カンパーの顔面角理論は動物の頭部の形状を数値化することで，種々の動物や諸民族の定量的な比較（ができるという思い込み）を可能にし，博物学に転回をもたらした。18 世紀

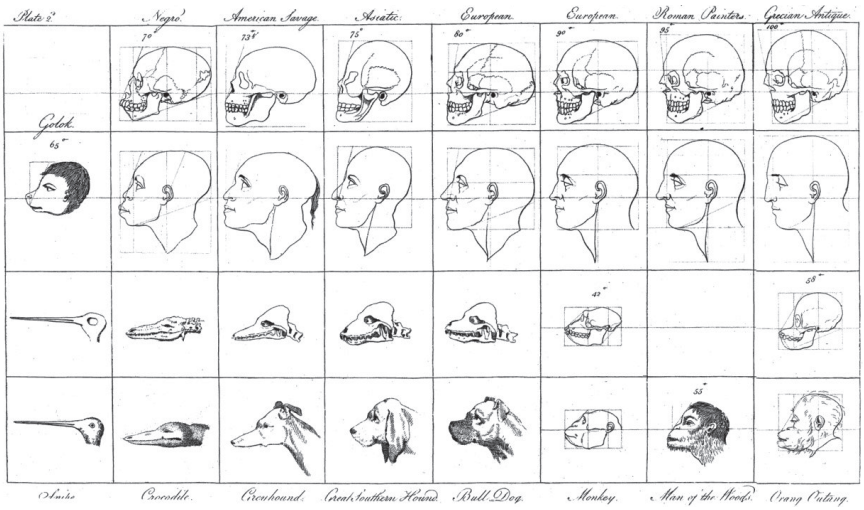

図２　チャールズ・ホワイトによる人間と動物の顔面角図（White 1799 Plate 2）

の博物学のほとんどは旅行記などの記述に頼る印象批評的なものか思弁的なものでしかなったし，従来の博物学に定量的な分類基準を持ち込むことで大きなインパクトを与えたリンネの分類方法も観察と集計による事実の整理を超えるものではなく，実際の分類には役立たない面が多々出てきて廃れていった。しかし顔面角理論は個体を越えて動物一般に該当する（根本的に間違っていたとはいえ）科学的法則性を見だすことで，いわば事物の蒐集と形態的な類似性に基づく分類でしかなかった博物学を，法則に則って演繹的に対象をマッピングできる科学へと押し上げた（と誤認された）のだった。

実際，カンパーの顔面角理論はこの後に論じるブルーメンバッハに採用されたし，英国に渡り，ジョン・ハンターやチャールズ・ホワイトらの医師によって改良されて展開された。ハンターはスコットランド人の医師で，カンパーとは異なって垂直軸からの顔面角度によってヒトと動物の頭蓋骨を計測して比較した。ホワイトはヒトの頭蓋骨をハンター流の顔面角を用いて人種および動物を比較して研究し，『人類，種々の動物，野菜における定期的な進化と退化』を刊行した（White 1799）。その中で示されている図版（図 2）を見ると，サルと思しき動物の顔面角は 65 度，ニグロは 70 度，アメリカの未開人（American Savage）は 73 度，アジア人は 75 度，ヨーロッパ人は 2 種類あって 80 度と 90 度，ローマ人画家の描いた絵から得られたらしいローマ人は 95 度，おそらくはギリシア彫刻から得られたのだろう古代ギリシア人は 100 度と，見事なまでに当時信じられていた人間の美の序列に人種の序列を示す顔面角が対応した。計測の基準や手続き，サンプルの代表性云々以前に絵画や彫刻が実際の頭蓋骨と比較されていることに驚かされるが，これまで論じてきたように啓蒙期の博物学や解剖学には今日からすると多分に前近代的で非科学的な部分があった。実際ホワイト

も多起源論者であったが，ヴォルテールとは違ってキリスト教批判からそう主張したのではなく，むしろ聖書にある意味忠実であろうとし，皮膚の色が異なる種は神の別な創造の結果生まれてきたのではないかと考えたことによる。啓蒙期の人種論は近代的な科学の始まりとして受けとめられてきたわけだが，今日からすれば驚くほど古典古代の知識や聖書の影響下にあったのである。

11．人種論のテクスト性（テクスチャリティ）

カントが「さまざまな人種」を発表したのと同じ年，ブルーメンバッハは学位論文『人類の自然的変異について』（Blumenbach 1776）を発表・刊行した。同時期に人間の多様性について論じたカントの議論が多分に思弁的であったのに比べ，ブルーメンバッハのそれはきわめて物質主義的（マテリアリスティック）で，記述的であった。それまでの人種論が旅行記などの間接的な情報に依拠したものであったのに対し，ブルーメンバッハはそれらに加えて頭骨などの人体標本を各地から収集し，解剖学や病理学的な観点から人種分類を行った。分類法はリンネに依拠したものであったし（Hudson 1999: 255），人類の単一起源の立場もリンネと同様であったが，サチュルス，穴居人，有尾人といった化外の民的な存在は情報の間違いとして否定され（岡崎 2005: 35–41），「異形の民族誌」的な記述は姿を消した。1775 年，1781 年，1795 年の 3 つの版で人種分類が変化しているのも，ブルーメンバッハのこうした唯物主義的な姿勢の反映と言え，依拠した情報を更新し続けていたことによる。1775 年版では 4 種であった人種が，1781 年版で 5 種になっているのは，ジェームズ・クックの第 1 回航海（1768–71）によって南太平洋の島々の情報や事物が多々もたらされ，ブルーメンバッハがオーストラリアやポリネシアの人々をほかの 4 種とは異なる亜種と見なしたことによる（Hudson 1996: 255）。

1795 年版になると，人種の数自体は 1781 年版と同じ 5 種であるものの，それぞれにコーカサス変種（varietatis Caucasiae），モンゴリア変種（varietatis Mongolicae），エチオピア変種（varietatis Aethiopicae），アメリカ変種（varietatis Americanae），マレー変種（varietatis Malaicae）という学術名がつけられた。第 1 人種のコーカサス変種が原型で，そこから離れた両端にモンゴリア変種とエチオピ変種があり，アメリカ変種はコーカサス変種とモンゴリア変種の間に，マレー変種はコーカサス変種とエチオピア変種の間に置かれた。内容的にはビュフォンの民族カタログ的な人種分類をカントの人種類型の枠組みで整理したものと言っていいのだが，ビュフォンやカントのように人類の系統変化を考えておらず，あくまでも気候，食物，生活習慣の違いが各変種に認められる差異を産んだのだとした。その意味では，人間の差異を説明する枠組みは古典的なままだと言ってよい。実際，ブルーメンバッハは「先駆的な人種科学者として描かれることが多いものの，プロテスタント世界における啓蒙主義の支配的なパラダイム，すなわち聖書には依拠せずに科学的に導出され，自然から

類推された論証によって，旧約聖書の偉大なる単一起源論を真実として裏付けるキリスト教的啓蒙主義を信奉していた」（Kid 2006: 85）。

同時にブルーメンバッハの人種論には当時のヨーロッパに纏綿としていた空想（ファンタジー）が大きく影響を与えていた。コーカサス変種はいわゆる「コーカソイド」（コケージアン，コーカサス人種）の起源とされ，ブルーメンバッハを悪名高い人種分類の創始者にしているが，先述したように実際に「コーカサス」を採用したのはマイナースだった。マイナースは多起源論の立場を採り，多分に思弁的で，信憑性の疑わしい人種分類を立てていたために，ブルーメンバッハは学術的立場としてはマイナースと相容れなかったが，人種分類においてはマイナースを踏襲し，ジャン・シャルダンの旅行記『ペルシア紀行』にしたがってコーカサス変種という概念を採用した。ブルーメンバッハは実際にジョージア人女性の頭骨を入手し，シャルダンの記述を踏まえながら頭骨の完璧な美しさをほめたたえ（弓削 2011: 16），またコーカサス地方は人類発祥の地であるという伝説――中世において聖書の記述を実際の世界地理にあてはめることが試みられ，大洪水の後にノアの箱舟が漂着したとされるアララト山が小カフカス山脈（コーカサス）に位置すると考えられた――を踏まえて，ブルーメンバッハは「一つはその近隣，とりわけその南斜面が人間で最も美しい人種，つまりジョージア人を提供するからで」，第二には「この地域のどこかに，最も高い蓋然性をもって人類の祖をおくべきだと思われるからなのである。というのは，まず，その系統が，すでに見てきたようにその頭蓋骨の最も美しい形態を示し，…それは我々が人間の原初の色と考えている白い皮膚を持っている」（岡崎 2005: 43-4）と考え，コーカサスという亜種名を採用したのだった。

興味深いのは，1790 年刊行のブルーメンバッハの『博物学研究（*Beyträge zur Naturgeschichte*）』では，第 1 人種の挿絵はターバンを巻いた男性が彼に寄り添って甘える女性と飲み物を運ぶ女性にかしずかれているハーレムを連想させる図像となっているのだが，1796 年刊行の『博物学対象図会（*Abbildungen Naturhistorischer Gegenstände*）』では，ロンドン在住のトルコ大使ジュズフ・アグィア・エフェンディの半身像になったことである。ブルーメンバッハ自身がトルコ大使の故郷がコーカサスに近いからという理由でモデルに選んだのだという（弓削 2011: 20-1）。マイナースやブルーメンバッハがコーカサス人種のモデルに非ヨーロッパ人を選んでいるのは，当時のコーカサス人種が必ずしも形質的な意味での「白人」を示していたのではなく，聖書の権威が失墜しつつも残存しており，いまだ世界の再分割に伴う人間の多様性の配置に伝統的な歴史的関心が大きく影響を与えていたことを示していよう。18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて通俗的なオリエンタリズム（東洋趣味）がヨーロッパで人気を博したことも（Said［1978］2003: 118），シャルダンへの参照も含めてそうした歴史への関心にかかわっているだろう。

また図像から女性が排除されたことに関しては，新しいジェンダー規範が作用したことが指摘されている（Siebinger 1993=1996; 弓削 2011）。啓蒙期，女性は知的にも身体的にも男

性に劣る存在と見なされて客体化され周縁化されることで，学術という知的な領域において人種の代表（リプレゼンテーション）＝表象には官能的な女性ではなく，理性的で威厳がある男性がふさわしいとされるようになったというのである。世俗化の進展によって知の規範としては力を失いつつあるとはいえ，いまだ強力な影響力を持つ古典古代や聖書の伝統と新たな伝統としてのオリエンタリズムや新しいジェンダー規範が交差しつつ移行する啓蒙期後半には，ブルーメンバッハをはじめとする博物者やフィロゾフたちにこうした古い伝統と新しい社会規範がないまぜになったテクスチュアルな姿勢が生み出されたのだろう。テクスチュアルな姿勢とはエドワード・サイードの概念で，「人間的なものと直接に遭遇して方向性を見失うよりも，むしろテクストの図式的な権威に寄りかかろうとする」ことであり，「こうしたテクストが，単に知識だけでなくそのテクストが叙述しているかにみえる当の現実をさえも創造することができる」（Said［1978］2003: 92-4）ものである。啓蒙期，ルネサンス以来の古典古代の知識と大航海以来非ヨーロッパからの大量な情報の流入によって，それまでは世界認識の原理であった聖書の規範力が著しく低下し，科学革命を経て観察と経験に基づいた合理性が世界認識に求められるようになりながらも，「人間」に関してはその認識の「型」は変わらず，古典古代のテキスト，旅行記や報文などに基づいたブッキッシュなものでしかなかったと言ってよい。というより，従来の聖書に基づく世界認識が瓦解を続ける近世期あるいは近代初期にあっても，現実の人間をリアルに対象化する態勢は十分に形成されておらず，聖書に代わる古典古代のテキスト，旅行記や報文が世界認識の参照テクストであり，そのテクストがいまだ現実を作り上げていたのであった。

啓蒙期の博物学者やフィロゾフたちの多くは，程度はどうあれいわゆる伝統的な聖史（sacred history）からの離脱を目指す合理主義者であったわけだが，宗教保守の側から啓蒙主義的人種論を包摂しようとした者もいた。その恰好の例がサミュエル・スタンホープ・スミスである。長老派牧師でニュージャージー大学の学長にもなったスミスは，聖書の権威を擁護する立場から単一起源に基づく人間の多様性を論証すべく『ヒトの皮膚の色および姿態の多様性に関する一試論』（Smith 1787）を執筆した。啓蒙期に進展していた合理的な説明と聖書の記述が無矛盾であることを示そうとしたスミスは，諸人種の差異は単一のヒトが環境（気候，生活様式，社会性）によって変化したもので，固定化されたものではなく可変的なものだとした。単一起源論を神学的に信奉するスミスは人種なるものを認めないばかりではなく，非ヨーロッパの人々に対する蔑視観を微塵も隠そうとしないものの，ニグロやインディアン〔先住アメリカ人のことだが，原文でこの言葉が使われている場合は本稿ではそのまま用いる〕などの人種が生活環境の変化だけで白人に変わりうるとまで主張するある意味ラディカルな環境決定論者であった。その意味で『ヒトの皮膚の色および姿態の多様性に関する一試論』は，米国史家の清水忠重が述べているように，スミスの「準備した立論からする場合，科学の自立化を防止することはそもそも不可能で」しかなかった（清水 1978: 107）。

ただスミスの議論が興味深いのは，人種の差異と階級の差異が同質のものとされていることである。

> スミスは階層間にもはっきりした身体上の相違があることを主張しているわけだが，われわれの注意を引くのはこうした白人社会内部での〈階層的な〉上下の違いが，そのままニグロと白人との〈人種的な〉違いへと直結させられ，これら両者が同質的なものとして，まったく同じ次元で論じられているということである。
>
> スミスの念頭には一つの観念が暗黙のうちに前提とされていたように思われる。それはいわばある人間の姿態の優美さないし均整度は，かれが所属する人間集団の文化的な洗練度や文明の高低と密接に照応し合っているという見方である。（清水 1978: 100）

身体的特徴と精神的傾向は対応するという古典古代以来の心身観が，啓蒙期固有の文明度という判定を経由しつつ変化することで，自国内の階級的差異が人種的差異に転換されるこうした事態は，後述する啓蒙期に形成されるブルジョワ市民社会のリスペクタビリティ（市民的規範）の在り方に大きく関わるものであった。

12. “ニグロ”という限界事例（マージナル・ケース）

啓蒙期の人種論を見るとき，否応なしに気づかされるのは黒人（アフリカ人）に対する侮蔑的あるいは見下した記述の数々である。もちろんラップ人，先住アメリカ人，アジア人などを含む非白人（非ヨーロッパ人）一般にそうした表現は使われているのだが，他の非白人が論者によっては肯定的に評価されたり，否定されるにしてもその度合いにかなりの幅があるのに比べ，黒人を劣等視する評価は見事なまでに一貫している。以下，啓蒙期人種論における黒人（ムーア，ニグロ，ホッテントットなどのアフリカ人）についての否定的な言説を，主要なものだけになるが確認してみたい。

人種分類の嚆矢とされるベルニエが喜望峰の黒人を「醜い」（Bernier 1684: 151）と記述するのに始まり，体系的な人種分類を初めて作ったとされるスウェーデン人のリンネは「狡猾，鈍く，無頓着」と黒人の特徴を記す（Linné 1758: 22）。啓蒙主義の立役者の一人であるモンテスキューは「もし，われわれのもっている黒人を奴隷にする権利を支持せねばならないとすれば，次のように言うだろう」と前置きしつつ，「ニグロが常識をもっていないことの証拠には，彼らは，文明国ではきわめてたいせつな金よりも，ガラスの首飾りのほうをもてはやす。これらの連中が人間であると想像することは不可能である。なぜなら，もしわれわれが彼らを人間と考えるならば，人々はわれわれのことをキリスト教徒ではないと考えだすであろうから」（Montesquie 1748=2016: 178-9）と当時の黒人蔑視の風潮を皮肉る。ビ

ュフォンはムーアを愚鈍と述べ，ホッテントットを醜いとし，ニグロは知性に欠けるとする（Buffon［1749］2009: 495–6, 509）。モーペルテュイはホッテントットを醜いと述べ，黒人を伝承の巨人や小人と並列しつつ奇形種族とし，それがゆえに南に追いやられたのだと述べる（Maupertuis［1745］1980: 144）。ヒュームも先に挙げた注の箇所で見たように「わが国の植民地は言うに及ばず，黒人奴隷はヨーロッパ中に散らばっているが，彼らにはなんらかの才能のきざしさえ発見されていない」（Hume［1753］1758: 252）と言い放つ。ルソーはその教育論『エミール』において「脳の組織は両極の地ではそれほど完全ではないように思われる。ニグロもラップランド人もヨーロッパ人の感官をもたない」から生徒を採るなら温帯地域からだと言う（Rousseau 1762=1986: 36）。ヴォルテールは「大部分の黒人（ニグロ）やすべてのカフィール人は同様の愚昧状態に陥っており，これからも長くその状態を続けるであろう」（Voltaire 1756=1989: 13）と予言する。啓蒙期に植民地支配を批判しえた数少ないフィロゾフの一人であるディドロにしても（永見 2018: 13），百科全書における「人類（Humaine espèce）」の項目で――その内容はほぼビュフォンの議論を踏襲したものだが――「ニグロは背が高く，太っていて，体軀は良いが，愚かで無能で」，「全般的に精神が希薄だが，感情がないわけではない」と説明する（Diderot 1765: 348）。カントは先に挙げた「さまざまな人種」で「要するに，ニグロは頑強で，筋肉質で，体は柔軟だが，彼らを生んだ土地の豊かな世話のもとで怠惰で，だらしなく，ぶらぶらしているのである」（Kant 1775=2001: 409）と黒人を貶める。サミュエル・スタンホープ・スミスは「その風俗は最も獣的であり，その身なりと心の能力は，人間のどの種族よりも獣に近い」と指摘する（Smith 1787: 94）。こうした黒人に対する否定的な言説は枚挙にいとまがない。少し時代を下るが，ドイツの哲学者ヘーゲルが世界史を考察するのに必要とされる地理的条件を論じる文脈で，当時のヨーロッパの黒人観の典型と思われる叙述を行っているので，少し長くなるが――といってもヘーゲルは黒人の劣等性をながながと論じているので実際にはその一部でしかないのだが――引用したい。

> 黒人（Neger）の特徴はといえば，その意識がなんらかの確固たる客観性を直観するにいたっていないことが，まさにそれで，人間の意思が関与し，人間の本質を直観させてくれる神や法律がかれらのもとにはない。アフリカ人は，個としての自分と普遍的本質としての自分との区別を認識する以前の，素朴で内閉的な統一のうちにあって，自己とはべつの，自己より高度な絶対の実在については，まったく知るところがありません。すでにのべたように，黒人は自然のままの，まったく野蛮で奔放な人間です。かれらを正確にとらえようと思えば，あらゆる畏敬の念や共同精神や心情的なものをすてさらねばならない。…だから，黒人は人間というものを完全なまでに軽蔑していて，法や共同体のありかたも軽蔑を基本としています。死者の霊があらわれることはあっても，魂の不死についてはな

んの知識もありません。人間は，信じられないほど価値のないものとされ，暴虐も不正とは見なされず，人肉を食べることも広くおこなわれている許可事項です。…黒人はヨーロッパ人の奴隷にされ，アメリカに売られますが，アフリカ原地での運命のほうがもっと悲惨だといえる。原地には絶対の奴隷制度があって，というのも，奴隷制度の根底は，人間がいまだ自分の自由を意識せず，したがって，価値のない物体におとしめられるところにあるからです。黒人は道徳的感情がまったく希薄で，むしろ全然ないといってよく，両親が子どもを売ったり，反対に子どもが両親を売ったりする。どちらがどちらを所有することもできる。奴隷制度の浸透によって，わたしたちのもつような，道徳的尊敬にもとづく絆はすべて消えうせ，わたしたちがたがいに要求しあうような敬意を，黒人は相手に期待する気がおこらないのです。（Hegel 1837=1996: 160-4）

ヘーゲル自身のアフリカ，アフリカ人に対する差別的な誤認は置くとして，ここで確認しておきたいのは，こうしたアフリカ，アフリカ人に対する否定的な言説は啓蒙期のフィロゾフ，博物学者一般に見られるものの，だからといって彼らは必ずしも黒人の置かれた状況を肯定してはいなかったことである。モンテスキューは先に挙げた『法の精神』15 篇の終わりで「奴隷制にもっとも賛成した人々が，もっともそれをいやがるだろうし，もっとも貧しい人々も，それをおそれるのは同じだろう。だから奴隷制に賛成の叫び声は，奢侈と享楽のための叫び声であって，公共の至福に対する愛の叫び声ではない」（Montesquie 1748=2016: 183-4）と奴隷制を揶揄した。ヒュームは黒人蔑視を隠さなかったが奴隷制には反対した（「古代諸国民の人口について」）（Hume 1777=2011: 306-74）。ビュフォンは『博物誌』でいくぶん唐突に，美徳の芽を持つニグロが「隷属状態に陥り，何も得られぬまま常に働くよう義務付けられることに同情せずには彼らの歴史を書けない」とニグロに同情を見せた（Buffon［1749］2009: 509-11）。ディドロは「金に対する飽くなき渇望は，あらゆる取引の中で最も悪名高く残虐な取引である奴隷を生みだした。人々は自然に対する犯罪を語るとき，奴隷制を最も恐ろしいものとして挙げることはない。ヨーロッパ諸国の大半は奴隷制度によって汚され，卑劣な利己主義が人間の心の中にある，同胞に対するあらゆる感情を押し殺してしまったのだ」と奴隷制を打ち立てたヨーロッパの利己主義を痛烈に批判した[5]。ニグロを蔑視するヴォルテールも小説『ガンディード』では，世界は善なる神が創造したものゆえに常に最善であるという最善説を信じる主人公が自らの信仰を捨てるのは南米スリナムで黒人奴隷への虐待を目の当たりにしたことに設定した（Voltarie 1759=2015: 121-2）。ルソーは『社会契約論』で「奴隷権は，それが正当ではないというだけではなく，不合理で，なんらの意味もない，という理由からしても，無効である」（Rousseau 1762=2005: 219）と述べた。カントも黒人を劣等視していたが，奴隷制は人道に悖るものとして否定した（「永遠平和のために」）（Kant 1795=2000: 274-6）。先述したヘーゲルもアフリカ人の奴隷化はア

フリカ人の後進性ゆえに仕方がないと反動的に擁護しつつも「人間の本質が自由にある以上，奴隷制度はどこからどう見てもまちがっている。が，それをさとるには人間が成熟しなければならない。とすると，奴隷制を廃止するには，一挙になくすより，徐々に解体していく方が適切かつ正当なやり方といえるでしょう」（Hegel 1837=1996: 169）と奴隷制自体は批判してみせた。

その意味では，ブルーメンバッハ――今日では白人（コケージアン）という人種名の創始者と誤認されているがゆえに，悪しざまな人種差別主義者と見なされがちだが――の黒人に対する理解は当時において傑出していた。「これらの黒人兄弟の気質や能力について，多くの意外な目撃者が私に断言したことの真実を，同様に私に確信させてくれた。つまり，これらの点と自然な心の優しさにおいて，他のどの人種よりも劣っているとは到底考えられないのである。私は意図的に，概して自然な心の優しさは，輸送船や西インドの砂糖プランテーションにおいて，白人処刑者の残虐性によって，決して衰えたり消滅したりしたことはない」と述べ，自由を買い戻した英国の元奴隷黒人イグナティウス・サンチョ（1729–80）やグスタフ・ヴァッサ（別名オラウダ・イクイアーノ：1745–97）――前者はカリブから英国に運ばれた後に経済的に独立して事業家かつ作家となり，後者はアフリカからカリブに運ばれて英国海軍の奴隷になりながら自由を獲得後に英国で作家となって奴隷制廃止を訴えた――などの名前を挙げて，黒人がヨーロッパ人に勝るとも劣らない知性を持つと主張した（Blumenbach 1790: 91, 102）。

こうした反奴隷制の主張には，啓蒙期とともに始まっていた奴隷制への反対・否定が，啓蒙時代の進展とともに大きな運動になって展開され，ヨーロッパの知識人たちの奴隷に対する見方を変えていたことがあっただろう。17 世紀後半に北米でクエーカー教徒による奴隷制反対運動が起きて以降奴隷制の否定や反対は大きくなっていた。特に啓蒙期後半には人間性を尊重するその思想の影響もあって奴隷制反対の声は強まり，英国では 1760 年代に国教徒のグランヴィル・シャープが奴隷制反対運動を展開し，1787 年にはクエーカー教徒による「ロンドン奴隷貿易廃止教会（Society for the Purpose of Effecting the Abolition of the Slave Trade）」が設立されて，大規模な奴隷制反対運動が展開された（英国では 1807 年に奴隷貿易禁止，1833 年に奴隷制廃止）。フランスではロンドン奴隷貿易廃止教会の運動を受けて，1788 年にカトリック司祭アベ・グレゴワールや数学者・哲学者のコンドルセらによって「黒人の友協会（Société des Amis des Noirs）」が設立され，奴隷制は批判・否定されて，フランス革命を経て 1794 年に廃止された（1802 年にナポレオンが奴隷制をいったん復活させたが，1820 年に奴隷貿易廃止，1848 年に奴隷制廃止）。人間性を讃える啓蒙思想においては奴隷制はあってはならない制度だとみなされることはある意味当然であった。

しかし注意しなければならないのは，奴隷制反対運動によって批判されていたのは，奴隷制を行うヨーロッパ人たちの思考や所業であったことである。黒人のヨーロッパ人に対する

劣等性は当然視されており，先述したフォルスターが典型であるように，その蒙昧はヨーロッパに導かれることで啓かれる必要があった。ブルーメンバッハをはじめとする黒人を擁護する啓蒙期のフィロゾフたちが，黒人も潜在的に知性を持つがゆえに奴隷化は許されないというとき，その知性はあくまでもヨーロッパのものであって，今日でいう文化相対主義的な観点はなく，ヨーロッパの至上性は前提だった。征服期，ラス・カサスがインディオの文化・習俗を観察・調査し，今日からすれば限界があったとはいえ，インディオが当代のスペインと比肩する社会性や歴史性を持つことを繰り返し主張したような擁護の姿勢は啓蒙期の知識人にはほとんど見られなかった。フランス生まれのユグノー教徒で北米移住後にクエーカー教徒となって反奴隷制運動を展開したアンソニー・ベネゼットは過去の旅行記，探検記を再検討して，アフリカ人の生活や習俗が文化的であることを示し，アフリカ人が隷属されて当然の未開な者でも野蛮な者でもないと奴隷制批判の論陣を張ったが（Benezet 1766），啓蒙期においてこうしたアフリカ人理解はきわめて例外的なものだった。たとえば先述した司祭のアベ・グレゴワールは，ラス・カサスの先住アメリカ人擁護論に影響を受けて奴隷制廃止を訴えたが，その奴隷解放論自体はフォルスター同様きわめて啓蒙主義的で，革命の理念を奉じる教育を通じて人間の平等は獲得できるとする徹底した共和主義によっていた。

西欧諸国は 16，17 世紀，ラス・カサスの報告にもとづいた征服におけるコンキスタドールの非道な行為を口実に「黒い伝説」（残虐かつ不寛容で，貪欲で残虐，偽善的な国民であるという反スペインのプロパガンダ）を作り上げ，その海外進出とヨーロッパでの覇権を牽制すべくスペインを野蛮だと貶めたが，それは自分たちが行う奴隷貿易や奴隷制の「野蛮さ」を反省する契機にはならなかったし，奴隷にしているアフリカ人の人間性を実際の社会性や歴史性から顧みることにもつながらなかった。啓蒙期の博物学者やフィロゾフたちの奴隷制批判も，大半はヨーロッパ人のアフリカ人に対する非道な行為を批判して嘆いてみせるだけの自閉的な感傷の域を出るものではなかったのだった。

13. 大西洋奴隷貿易・人種・政治的主体

啓蒙思想期における黒人への蔑視的な見方について見てきたが，ここで考えたいのはこうした見方が生まれた歴史性とその意味である。一見この蔑視は古今東西よく見受けられる自民族中心主義とそれに伴う異民族蔑視のようだが，実は特殊歴史的なもので，大航海時代に始まり，啓蒙期に拡大した大西洋奴隷貿易が大きく影響し，同時にヨーロッパ社会における政治的主体の変化が関わっていた。以下それを論じていくが，まず問題にしたいのは，啓蒙期の人種言説における「ニグロ」の指示対象（レファレント）の曖昧さとその蔑視的な語感（ニュアンス）である。アフリカ人（Africans, Africains, Afrikanisch），黒い肌の人々（the Blacks, les Noires, die Schwarzen）がニグロ（negro, nègre, Neger）と互換的に使われることがある一方，その指

示対象は必ずしも一致せず，それらの関係はきわめて曖昧でありながらも，その否定的なニュアンスは一貫していることである。この点について，フランスのラテンアメリカ研究者オレリア・ミシェルの議論はきわめて示唆的である。ミシェルによれば「ニグロ」とはひとつの換喩にほかならない。

> その語は，ポルトガル人がアフリカで買い，主にスペインやポルトガルの支配するアメリカに売った奴隷のみを指した。つまり，その頃には，アメリカに入植したヨーロッパ人にとってアフリカ人と奴隷の中間の意味に相当するように変化していたのだ。当時，アフリカからやってくる黒人（les Noirs）はすべて奴隷だった。スペイン帝国統治下でインディアンの奴隷が禁止された後は，ほとんどすべての奴隷は黒人だった。こうして一つの換喩が定着した。一部を意味する言葉が全体に使われるようになったのだ。つまり，黒い肌の色と奴隷制が一つの語に固定され，その意味の拡張によってアフリカが奴隷の地になったのだ。（Michel 2020: 22=2021: 24）

つまり当初アフリカから連れてこられた奴隷を意味していた「ニグロ」は，特定の人々を指示する言葉ではなくなり，奴隷，黒い肌，アフリカ（人）をイメージにおいて結びつけ，さらに種々のものにその結びつきを拡張しうる連想概念（換喩）となったということである。先に見たようにニグロという語の外延がきわめて曖昧なのは，それが実体を指示する言葉ではなく換喩だからである。奴隷はニグロであり，黒い肌であればニグロであり，アフリカはニグロの地であり，アフリカ人はニグロである。換喩であるがゆえにこうした連想はそれをイメージする人間の，そしてその人間が生きる社会で共有される想像力に依拠して恣意的な拡張が可能になる。しかし重要なのはこの「ニグロ」の核にある奴隷のイメージが大西洋奴隷貿易によって生まれたことである。この奴隷制に関してもミシェルが説得力ある議論を展開しているので，まずそれを確認しておきたい。

ミシェルはフランスのアフリカ研究者クロード・メイヤスーの議論（Meillassoux 1986）を援用しつつ，「親族性（parenté）」という概念によって奴隷を次のように説明する（Michel 2020: 37-8=2021: 36-7）。奴隷は自分の生まれた共同体と自分を結びつける社会的義務や労働や相互関係から解放されており，通常社会集団の構成員を結びつけている時間差（différes）の相互扶助への参加から排除される。すなわち奴隷は生産はするが，再生産のサイクルには貢献できないため，親族としてみなされない。親族性が社会秩序を統制し，集団内での各人の立場と，集団との関係を決定づける社会では，親族でありえないことは人間性からの永久追放に相当する。親族性から疎外されることは，同族の人，自由人，国民，市民，「人権」をもつ「人間」に与えられる資格，あるいは集団への帰属を定義するあらゆる身分を伝承することができない。この親族性において「自由」であることとは集団に所属するが

ゆえに奴隷やよそ者が持ち得ない，社会に主体的にコミットできる特権を持つことなのだが[6]，奴隷は決してこの自由を持つことができない。

そうして親族性や自由を剝奪された奴隷は「脱人格化（dépersonnalisation）」「非性化（désexualisation）」「脱文明化（décivilisation）」という特徴を持つことになる（Michel 2020: 43-5=2021: 41-3）。「脱人格化」とは生まれた社会での関係，支えをすべてて失うと同時にホスト社会（奴隷として生きる社会）でそれらの関係，支えを新たに再生して社会に関わることから排除される。すわなち社会化する可能性を奪われることである。「非性化」とは奴隷がホスト社会の再生産から排除されることである。労働力だけが求められる奴隷の調達は戦争捕虜や奴隷狩りを通じた外部からの継続的な移入や市場での買入れに依存しており，ホスト社会では奴隷に（暴力的に性愛の対象とされても）生殖能力は求められず，ただ労働力としての有用性だけが求められて，奴隷は再生産する性とは見なされない。「脱文明化」とは，奴隷は主人との関係だけにおいて社会に関わるために，社会や町に帰属する権利を剝奪され，決して市民（civile）にはなれず，市民権（citoyennete）の属性を伝承もできないことである。

大西洋奴隷貿易によって始まった新大陸（アメリカ）の奴隷制は，それまで存在した奴隷制とは異なり，前述した奴隷の特徴を純化させるシステマティックな生産様式――市場と生産地と労働供給地が分離されつつ海運によって結ばれ，換金作物用の農場（プランテーション）が人工的に植民地に作られて，集約型労働にアフリカ人奴隷が投入された――に基づく「近代」によって創出された奴隷制であった（池本 1987: 3）。そもそもアメリカでのプランテーションは，ポルトガル商人がアジアから入手していた付加価値の高い奢侈品であった砂糖を自産するために，アフリカのギニア湾にあるサントメ諸島にアフリカ人奴隷を使ってサトウキビを栽培することで始まった（ヨーロッパではサトウキビは生育せず，労働力も調達できなかった）。ポルトガル商人がアフリカ人奴隷を投入できたのは，アフリカ貿易の一環として金（きん）を獲得するために，アフリカ諸王国で行われていた奴隷売買を商船によって広域に展開する仲介売買を行っていたからだった（Michel 2020=2021: 72-4）。アフリカ貿易においては当初副次的なものであったアフリカ人の奴隷売買は，アメリカでのプランテーションの開始によって大西洋奴隷貿易の主商品に組み替えられたのだ。

植民地（アメリカ）は，市場であるヨーロッパとも労働力であるアフリカ人の生地からも遠く離れて隔絶し，プランテーション農場を中心に据えてつくられた，きわめて人工的で非循環的な社会だった。タバコ，砂糖，コーヒー，木綿などのヨーロッパ向けの嗜好品（非本質的な消費財）となる作物が主生産物で，植民地それ自体に必要なものでもなければ還元されるものでもなかった。同時にプランテーションは投資事業であるがゆえに，利潤獲得のためにヨーロッパで飛躍的に拡大する消費に応じて増産が目指された（後にアメリカ，アフリカもヨーロッパの従属的な市場となった）。奴隷を労働可能期間にどれだけ働かせられるか

が重視されて労働は集約志向となる一方，労働力は（先住アメリカ人の奴隷化がうまくいかず，白人年季奉公人の利用も本国で種々の問題が生じて制度的に廃れた）17 世紀半ば以降はアフリカ人奴隷の短期的な調達によって賄われ，奴隷自身の再生産（性や家族形成）は等閑視された。農園は農園主のパターナリズムと暴力によって運営され，アフリカ人奴隷は身分的にヨーロッパ人から厳しく峻別されて労働および社会から疎外され，植民地社会の親族性に組み込まれることはなかった。アフリカから連れて来られたアフリカ人にとってアメリカのプランテーションは脱人格化，非性化，脱文明化が徹底される「新世界」にほかならなかった。同時にこの「新世界」は近代を準備するものでもあった。ヨーロッパの奢侈消費を支える大規模なプランテーション経営は「とことんまで資本主義的性格」（Sombart［1912］1922=1969: 230）を持ち，市場と生産地と労働力が分化される生産様式は現代の産業グローバリゼーションの先駆けと言えるものであった（Michel 2020: 82）。

こうした近代奴隷制を発展させたのは啓蒙期ヨーロッパに誕生した絶対王政だったが，実はこのことがニグロの否定的な捉え方に深く関わっていた。絶対王政は，宗教革命によってヨーロッパのカトリシズムの権威が弱体化したあと，ヨーロッパ諸王が軍事力（常備軍）と経済力（重商主義）の強化による国力の向上を通じてローマ教会の理念的統制，神聖ローマ帝国の象徴的・超越的権威，諸侯との封建関係を超克し，国王権力が絶対となる領土国家――今日の諸国民国家の大雑把な輪郭を形成した――が国際秩序の基本的な単位となることで生まれた（村上：83-90）。絶対王政では，多元的で相対的な主従関係に基づく身分社会に経済力拡張主義が持ち込まれ，社会的統合と中央主権化が図られた。先述した近代奴隷制（植民地開発）も経済力拡張主義の重要な一翼を担うものにほかならなかった。こうしていわば国策によって保護された商人が富を蓄え力を持ち，ブルジョワが生まれて近代市民社会を生み出されていくのだが，まさにこの「市民」という政治的主体の歴史的規定がニグロをニグロたらしめることなったのである。

近代市民社会及び市民革命の理論的基礎を築いたとされ，啓蒙思想の始祖の一人であるジョン・ロックは『統治二論』で奴隷について次のように述べた。

> しかし，それとは別に，もう一つの種類の僕が存在する。それは，われわれが奴隷という特別な名で呼ぶものであって，彼らは，正当な戦争において捕らえられた捕虜に他ならない。彼らは，自然権によって，主の絶対的な統治権と恣意的な権力とに服従せしめられる。私に言わせれば，彼らは，生命とそれに伴う自由とを喪失し，その資産を失った存在であり，いかなる意味でも，固有権（プロパティ）もつことができない隷属状態にあるのだから，そうした彼らが，およそ，政治社会の一員をなすとは考えられない。政治社会の主要な目的は，固有権（プロパティ）を保全することにあるからである。（Locke 1690=2010: 391）

よく知られているように，ロックにとって人権を持ちうる政治的主体とは，神から万人に与えられた共有物としての自然に労働を通して働きかけ，自然から生産物を作り出して財となしうる人間（資産者）のことであった。そして財をなしうる人間が政治的主体として市民になりえ，財産の不可侵性を担保に自由と平等が保障される市民社会すなわち文明社会が作られるとした。こうした所有権が文明的な価値と関わることは，スコットランド啓蒙の歴史家・哲学者であるアダム・ファーガスン――自らが生きるグレート・ブリテンをもっとも文明の進んだ社会と見なしていた（青木 2010: 98）――の所有権に関する以下のような言明から理解することができる。

> 所有権（property）が進歩に関わる問題であるということは，非常にはっきりしているように思われる。それは，時間の経過の帰結である他の数ある事柄の中でも，所有物を明確にする何らかの方法を必要とする。所有の欲望それ自体は，経験から生じる。所有物を獲得し改良するための勤勉（industry）は，怠慢か享楽のいずれかに向かう現在の性向を克服し，遠い目標を見据えて行動する習慣を必要とする。この習慣は徐々に獲得されるものであり，そして実際，これが，商工業の技術が発達した状態にある諸国民を特徴づける主要なものである。（Ferguson［1767］1995: 81=2018: 121）

所有権が人間性に関わるのは，所有というプロセスには人間の勤勉（industry）が深く関わるからである。いわば所有には自律的かつ長期的に規範を持ち続けられることすなわちモラルを把持し続けることが必要不可欠であり，それが文明人の証なのである。そしてこうした自律性＝モラルは啓蒙期において考えられた「市民」であるための必要条件にほかならなかった。

このような所有権（property）の考え方に立ち，ロックはアフリカ人や先住アメリカ人は自らの自然を開発できてない自律性を欠いた人間（未開人）であり，そのためにアフリカやアメリカは誰も専有権を持たない「荒蕪地」と見なされ，ヨーロッパからの植民者はそうした「荒蕪地」を労働を通じて開発すればその土地の所有権（プロパティ）が認められるとした。こうした「荒蕪地」における所有権の基礎付けから植民地主義の擁護者としてのロックという批判的評価が生まれ，議論されてきた。実際，ロックは奴隷制に否定的な見解を示しながらも奴隷貿易企業に投資しており，彼が起草した北米の植民地都市のカロライナ基本憲法には奴隷制を是認する条項があった[7)]。

ブルジョワの擁護と植民地主義の合理化に見える議論の問題性もさることながら，ここで注目したいのはロックが戦争捕虜による奴隷を是認していることである。イギリス史・カナダ史家のマイケル・クレイトンによれば，当時イギリスの作家たちのほとんどが奴隷の大多数を西アフリカに特有の戦争捕虜だと信じていた（Craton 1974: 72）。奴隷は古代からヨー

ロッパに存在し，ヨーロッパがキリスト教圏となっても聖書は奴隷を認めているとされたが，中世にはキリスト教徒の奴隷は禁止され，封建領土の奴隷は農奴に同化されて，奴隷制は主要な生産方法ではなくなっており，非キリスト教徒に適用される慣行と見なされるようになっていた。同時に，先のエドワード・ロングについて触れた際に確認したように，啓蒙期にあっても奴隷制を支えていた理論は，アリストテレスの自然的奴隷論（生まれつき主人と奴隷にふさわしい人間がおり，その関係は互恵的である）であった。そのため啓蒙期のヨーロッパにおいては，アフリカで戦争捕虜が生じるのは未開の異教徒のゆえであり，そうであれば未開の戦争捕虜（ニグロ）を売買し，ヨーロッパ人（文明人）がニグロ（未開人）をアメリカで奴隷として働かせることは，自然奴隷説からも生産主義の目的からも合理化され，疑問が持たれることはなかった。ニグロはキリスト教徒になってもそれだけでは決して奴隷から解放されなかったように，キリスト教徒には適用されないはずの奴隷はニグロにおいては否認された。さらには，先述した解放奴隷のサンチョやヴァッサの例が示すように，ニグロが解放されるには奴隷労働を通じて自らが得た金銭や財産によって“自由”を購入しなければならなかった。ニグロが“市民”になるには，自らの“生産性”を，獲得しえた金銭の多寡でヨーロッパ人に証かさねばならなかったのだった。実際には大西洋をまたぐ動産奴隷制度が成立しえたのは，征服期に教皇が新大陸の開発（簒奪）に応じてアフリカおよびアメリカに奴隷を認めたことによっていた。つまりヨーロッパ人の一方的な搾取的決定によって，ヨーロッパ人がアフリカ人奴隷をアメリカ（非キリスト教圏）に労働力として投入することが可能となり，それに促されてアフリカは奴隷の輸出地として大西洋貿易に組み込まれたのだが，当のヨーロッパ人はそうした歴史や機制に注意を払うことなどなかったのだった。

ここに転倒が生まれた。生産主義と消費主義に下支えされた市民／文明人であることが，親族性の剝奪されたニグロ＝アフリカ人奴隷の需要を増大させつつ使い捨てる事態を生み出しながら，ニグロは未開（非自律的で劣等）で生産性がないがゆえに未開地で奴隷となっており，それを未開地で使役させて新たな生産を行うことは文明的な行為と見なされたのである。そして自由と平等を人々にもたらす文明化が善である以上，ヨーロッパ人は未開地・未開人に文明（市民性）をもたらす権利・使命を持つことが正当化・合理化された。

実際，先述したように 17 世紀半ばには植民地労働力のアフリカ人奴隷への依存が増大し，18 世紀つまり啓蒙期には，アフリカ人奴隷は西欧諸国の経済的発展を支える植民地アメリカに不可欠な労働力となっており，アフリカとアメリカは事実上ヨーロッパ諸国の重要な経済的版図に組み込まれた。表 1 を見ればわかるように，18 世紀にはアフリカから植民地に運ばれる奴隷数が飛躍的に増大したが，それを担ったのは啓蒙思想の中心であったイギリスとフランスだった。ドイツを含むバルト海国にしても 18 世紀半ばに奴隷を運んだ船数が飛躍的に増大した。長らく大西洋奴隷貿易とは関係が希薄だと見られてきた近世ドイツの発展も，近年では大西洋貿易の恩恵が少なくはなかったことが研究で明らかにされてきている

表 1　アフリカから連れ出された船籍国別奴隷数（1501-1875 年）

国籍／年代	スペイン／ウルグアイ	ポルトガル／ブラジル	イギリス	オランダ	アメリカ合衆国	フランス	デンマーク／バルト海諸国	合計（人）
1501-1525	6,363	7,000	0	0	0	0	0	13,363
1526-1550	25,375	25,387	0	0	0	0	0	50,762
1551-1575	28,167	31,089	1,685	0	0	66	0	61,007
1576-1600	60,056	90,715	237	1,365	0	0	0	152,373
1601-1625	83,496	267,519	0	1,829	0	0	0	352,844
1626-1650	44,313	201,609	33,695	31,729	824	1,827	1,053	315,050
1651-1675	12,601	244,793	122,367	100,526	0	7,125	653	488,065
1676-1700	5,860	297,272	272,200	85,847	3,327	29,484	25,685	719,675
1701-1725	0	474,447	410,597	73,816	3,277	120,939	5,833	1,088,909
1726-1750	0	536,696	554,042	83,095	34,004	259,095	4,793	1,471,725
1751-1775	4,239	528,693	832,047	132,330	84,580	325,918	17,508	1,925,315
1776-1800	6,415	673,167	748,612	40,773	67,443	433,061	39,199	2,008,670
1801-1825	168,087	1,160,601	283,959	2,669	109,545	135,815	16,316	1,876,992
1826-1850	400,728	1,299,969	0	357	1,850	68,074	0	1,770,978
1851-1875	215,824	9,309	0	0	476	0	0	225,609
合計（人）	1,061,524	5,848,266	3,259,441	554,336	305,326	1,381,404	111,040	12,521,337

資料：（SlaveVoyage 2021: Trans-Atlantic Slave Trade-Estimates）より，作成上一部改変。

（菊池 2020）。

大西洋奴隷貿易のヨーロッパの産業資本主義発展への「貢献」に関しては，エリック・ウィリアムズ『資本主義と奴隷制』（Wiliams 1944）において提出されたいわゆるウィリアム・テーゼ以来数多く議論されてきた[8)]。しかしながらこの「貢献」を植民地の生産が本国の経済的発展に寄与した収益高に限るとき，多くの事柄が見落とされることになるだろう。こうした「貢献」において注視すべきは，植民地プランテーションの経営がヨーロッパの生産様式の効率化を促し，それによってヨーロッパ社会の近代化・資本主義的産業化が促されたことにあるからだ。実際，嗜好品・奢侈品の増産と消費拡大に伴う産業の発展は，富の蓄積とともに，市場（領土国家）内の物財の流通システムの規則化と取引契約の確実性を高めつつ，それを持続的に保障する領土の治安と平和の安定を国家にはからせ，交流密度の高い市場として領土を整備する要求が生まれて，流通にあたって障害や摩擦の少ない一定の均質性を担保できる言語や慣習を共有する（と見なされた）文化的共同体が領土国家の輪郭となった[9)]。さらにはそうした文化共同体と領土国家が重なる社会――やがてこの社会は国民国家につながっていくことになる――において，特権層が享受していた嗜好品・奢侈品の消費はブルジョワによる特権層の文化の模倣を通じて社会に拡大・定着し，ヨーロッパ社会は大

衆消費社会へと質的な変化（「生活革命」）を遂げた。

この生活革命は，ある意味近代における大きなメルクマールとなったと言ってよい。というのも奢侈品の消費は単なる生産物の使用や利用を超えて，社会的な認知を前提とした上で行われる道徳・規範・ステイタスに関わる「他者からの承認をめぐる闘争」となる消費主義のはじまりだったからである。すなわちこの生活革命はただ生活様式を変えただけではなく，社会の中心勢力となるブルジョワが新しい社会的意識形態あるいは道徳律であるリスペクタビリティ（respectability）――「体面」「品位」「名誉を重んずる姿勢」などを意味する――すなわち「個人や集団の行動に対する厳しい規範を組み入れた特有の文化形態であり，精巧な道徳的正当性を顕示するシステム」（Austen and Smith 1990; 布留川 1991: 28）を生み出したのだった。

そしてこのブルジョワのリスペクタビリティは，自らは進歩した存在（文明人）であるという自己認識とともにこの時代の市民的規範＝市民性を構成した。すなわち「市民」とは，ブルジョワのリスペクタビリティを持ちうる者の謂いとなったのである。実際，1793 年の人権宣言の正式名称は「1793 年の人間と市民の権利宣言（Déclaration des droits de l'homme et du citoyen de 1793）」であり，よく知られているようにここで規定されている「市民（citoyen）」とは 25 歳以上の一定の租税要件を満たす成年男子に限られていた。翻って，生産性がなく（啓蒙期の人種言説においてニグロの働きの悪さは諸所で指摘された），未開で（愚鈍，無能力であることも諸所で指摘された）従属的で親族性を持たない（とアフリカ社会を顧みることもなく一方的に決めつけられた）「ニグロ」は，財産と文化的な消費とそれを維持することによって作られたリスペクタビリティが尊ばれた文明人にして政治的主体であるヨーロッパ人の市民性の反照として，不道徳的かつ非文明的な形象を身に負わせられたのだった。

14. 結びにかえて

啓蒙期における人種言説を見てきたが，そこからわかることは博物学者やフィロゾフたちの人種に関する議論は，多分に前近代的かつブッキッシュな世界認識――聖書，古典古代の文献，旅行記――に依拠したもので，今日的な“実証”や“科学”の観点からすれば検証に耐えないものだった。もちろん宗教革命や科学革命を経ているがゆえに，前時代に比べれば格段に発展した合理的な思考，体系性への志向が認められ，経験，観察，事実を重視する姿勢は伺えるのだが，一方でテクスチャルな姿勢が極めて強固で，世界から新たに流入する諸情報に対応して世界認識の拡張や更新は行われるものの，人間集団に関わる新奇な事象に対しては新たな現実として認識枠組みそれ自体を変更して受容するのではなく，伝統的な枠組みのなかに解消して整理することが行われた。

その意味では，生物学的（遺伝的）な決定論に依拠して人間集団を差別的に序列化するというほどの意味で使われる，現在において科学的人種主義と見なされるものの起源をその類似性や関連性から啓蒙期の博物学者やフィロゾフの人種言説に直接求めることはそれほど生産的であるように思われない。博物学者やフィロゾフの人種分類・人種論は前近代的な枠組みに基づいた「分類」問題に終始していたからである。その意味では，先に論じたように，18 世紀に発達した解剖学にこそ今日の科学的人種主義に繋がる（擬似）科学的観点の萌芽（差別性の科学的本質化）が認められるように思われる。

しかしながらそれ以上に注目すべきは，啓蒙期における人種言説の分析から示したように，ヨーロッパの優越性という自己アイデンティティが近代市民社会のモラルの形成に深く関わったことである。啓蒙期において，大航海以来理解の進んだ諸民族の「人間」としての連続性に切断を持ち込み，ヨーロッパに富をもたらしている征服や奴隷制を合理化する自己優越性（進歩）を確保するために劣等な「他者」を作り出すツールとして「人種」が使われた。この人種的優越性はヨーロッパ人が「文明人」としての自己アイデンティテイを持つことにほかならなかった。そしてその自己アイデンティティには，領土国家の繁栄・進歩を支える生産主義と消費主義に裏打ちされたブルジョワ市民のリスペクタビリティの反映があった。この市民（すなわち人種的に優越する文明人）であることのふさわしさは，それを体現しようとする市民のモラルの実践において，近代市民社会においては原理的に均等な主体であるはずの人間に対し，偏頗的な主権（人権）の配分とそれに伴う差別や排他性を自己準拠的に持ち込むことで，様々に社会を切り分けることを可能にした。米国の心理学者アーヴィン・ストウブはモラル（道徳）に基づく社会的排除について次のように述べている。

> 道徳（モラル）の世界から人々が排除されることをどう理解すればいいのか。道徳的な原則や規則，思いやりや共感，他の人間とのつながりといった感情は，ある集団との関係ではどのように機能しなくなるのだろうか。このようなことが起きると，人々を不当に扱うこと――差別すること，他の人々に保証されている権利や機会を奪うこと，公正な報酬なしに労働を要求して搾取すること，人々に対して暴力を行使すること――が可能になる。道徳的排除は，ある種の動機の結果であるだけでなく，拷問，大量殺戮，ジェノサイドといった極端な暴力を導くそれらの動機を結びつけるものでもある。これらの動機には，個人や集団の自己概念の擁護，「より高次の道徳規範」たとえばより良い国家や世界の創造が含まれる。（Staub 1990: 47-8）

ここで示されている道徳的排除とその動機は，どれも人種主義が社会的に発動される際の実相である。ストウブの議論はこうした道徳的排除とその動機をいわば社会心理学的な観点から類型化することに目的があるのだが，本稿によって示された啓蒙期人種言説の分析から

すれば，この道徳的排除に焦点を当てることで，近代社会がそのメンバーシップに持ち込んだ排他性としての人種主義の“日常性”をより明確化できると思われる。人権の平準化が理念となった近代市民社会で，「人種」はその内外に人権の平準化を阻止し，序列的な配分や剝奪を行い，その暴力を正当化あるいは否認する実効的なツールとなった。それはショアー（ナチスによるユダヤ人大虐殺），米国深南部のセグリゲーションや黒人のリンチ，南アのアパルトヘイトといった極端な事例でイメージされがちな人種主義が実のところ，本稿で示唆したように，近代市民社会のモラルの形成に深く関わり，そうであるがゆえに日常で普通に機能し，個人や集団としての私たちの意識に大きく関わるものだからである。それゆえに人種言説の分析は，現在において人種主義として批判的に捉えられている事象の類似度や関連性に応じてその萌芽を遡及的に見出すことにではなく，そうした言説生産を可能にしたモラルの史的形成に焦点が当てられるべきだと思われる。

注

1）ゼメリングの論文からの引用訳出は森（2015: 250）によった。なお森が「黒人」と訳しているMooreは「ムーア人」とした。
2）カンパーの死後，息子のエイドリアン・ギレス・カンパーが父親の草稿をまとめたものをゼメリングが翻訳した（Camper 1792）。
3）17世紀初頭，オランダの医師ブールハーフェは当時最先端の学説でガレノス流の生理学を全面否定した血液循環論と古代以来の体液理論を融合させ，機械論的な視点から人体の各器官の機能や疾患を説明する新しい解剖学的医学理論を展開して，ヨーロッパに広く受け入れられた（坂井 2014: 85–9）。
4）メッケルとその研究の影響に関しては，（Pogliano 2020: 15–37）に詳しい。
5）引用した部分は，ディドロがギヨーム＝トマ・レーナル『両インド史』（Raynal 1770）に寄稿したものを，ジョン・ホープ・メイソンとロバート・ウォーカーが整理し英訳したものを利用した（Mason and Walker 1992: 212）。
6）この「自由」の定義は，ミシェルがフランスの言語学者エミール・バンヴェニストの議論（Benvenist 1969: 324）から援用したものである。
7）ジョン・ロックにおける植民地主義に関する批判的評価については（Armitage 2013: 90–131; 伊藤 1995, 1996; 高田 1994, 1995）に詳しい。
8）ウィリアムズ・テーゼに関する研究動向をまとめたものとしては，小林（2009）を参照。
9）絶対王政における産業化と資本主義の発展，またその領土が国民国家の基盤となったことに関しては，村上（1992: 125–9）の議論に多くを負った。

文　献

青木裕子，2010，『アダム・ファガースンの国家と社会――共和主義・愛国心・保守主義』勁草書房。

Armitage, David, 2013, *Foundations of Modern International Thought*, Cambridge: Cambridge

University Press.（平田雅博・山田園子・細川道久・岡本慎平訳，2015，『思想のグローバル・ヒストリー――ホッブズから独立宣言まで』法政大学出版局。）

Austen, Ralph A. and Woodruff D. Smith, 1990, "Private Tooth Decay as Public Economic Virtue: The Slave-Sugar Triangle, Consumerism, and European Industrialization," *Social Science History*, 14 (1): 95–115.

Bechhaus-Gerst, Marianne, 2011, "Medizingeschichte Wie die Medizin der Aufklärung 'den Afrikaner' schuf," *Deutsches Ärzteblatt*, 108 (36): A–1842–4.

Benezet, Anthony, 1766, *A Caution and Warning to Great Britain and Her Colonies in a Short Representation of the Calamitous State of the Enslaved Negroes in the British Dominions*, Philadelphia: Henry Miller, (Retrieved October 8, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/A_Caution_to_Great_Britain_and_Her_Colon/3IJKAAAAMAAJ?hl=en&gbpv=1, Google Books).

Benveniste, Émile, 1969, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes: L'économie, parenté, société*, Paris: L'édition de minuit.

Bernier, François, 1684, "Nouvelle division de la Terre par les différentes espèces ou races d'homme qui l'habitent, envoyé par un fameux voyageur à M. l'abbé de la *** à peu près en ces termes," *Le Journal des Savants*, Du Lundi 24 Avril, 148–55, (Retrieved September 6, 2023, https://books.google.co.jp/books?id=QykmjtRTBB8C, Google Books).

Blumenbach, Johann Friedrich, 1776, *De generis humani varietate nativa*, Goettingae: apud viduam Abr. Vandenhoeck. (Retrieved October 7, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Io Frid Blumenbachii De generis humani v/PeOEBlnYZcoC?hl=ja&gbpv=1, Google Books).

————, 1790, *Beyträge zur Naturgeschichte*, Göttingen: Heinrich Dieterich, (Retrieved October 7, 2023, https://books.google.co.jp/books?id=AKBTAAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl, Google Books).

Buffon, Georges-Louis Leclerc, Comte de, [1749] 2009, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi, tome 3*, Paris: Honoré Champion Éditeur.

Camper, Peter, 1792, von S. Th. Sommerring trans., *Uber den naturlichen Gesichtszuge in Menschen verschiedener Gegenden und verschiedenen Alters; uber das Schone antiker Bildsaulen und geschnittener Steine; nebst Darstellung einer neuen Art, allerlei Menschenkopfe mit Sicherheit zu zeichnen*, (Nach des Verfassers Tode herausgegeben von seinem Sohne Adrian Gilles Camper), Berlin: Vossische Buchhandlung.（森貴史訳，2012，『カンパーの顔面角理論』関大大学出版部。）

Craton, Michael, 1974, *Sinews of Empire: A Short History of British Slavery*, New York: Anchor Books.

Curran, S. Andrew, 2011, *The Anatomy of Blackness: Science and Slavery in an Age of Enlightenment*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Diderot, Denis, 1765, "Humaine espèce," Denis Diderot et Jean Le Rond d'Alembert eds., *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers tome 8*, 344–8, (Retrieved August 25, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Encyclop%C3%A9die_Ou_Dictionnaire_Raisonn%C3%A9/0nNEAAAAcAAJ?hl=en&gbpv=1, Google Books).

Ferguson, Adam, [1767] 1995, *An Essay on the History of Civil Society*, Cambridge: Cambridge University Press.（天羽康夫・青木裕子訳，2018，『ファガースン　市民社会試論』京都大学学術出版会。）

Forster, George, 1786, "Noch etwas über die Menschenraßen,"（Retrieved October 15, 2023, http://www.zeno.org/nid/20004782356, Zeno. org).（岡本伸一訳，1983，「人種論を再考する」フォルスター研究会編訳『ゲオルク・フォルスター作品集――世界旅行からフランス革命へ』三修社，151-83。）

Fredrickson, George M., 2002, *Racism: A Short History*, Princeton: Princeton University Press.

布留川正博，1991，「ウィリアムズ・テーゼ再考――イギリス産業革命奴隷制」『社会科学』同志社大学人文科学研究所，（46）：1-36。

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1837, "Geographische Grundlage der Weltgeschichte," *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Berlin: Duncker und Humblo, 75-100,（Retrieved October 10, 2023, https://books.google.co.jp/books?id=14NZAAAAcAAJ, Google Books).（長谷川宏訳，1996，「世界史の地理的基盤」『歴史哲学講義』岩波書店，138-74。）

Hudson, Nicholas, 1996, "From 'Nation' to 'Race': The Origin of Racial Classification in Eighteenth-Century Thought," *Eighteenth-Century Studies,* 29 (3): 247-64.

Hume, David, [1753] 1758, "Of National Characters," *Essays and Treatises on Several Subjects, a New Edition*, London: Andrew Millar, 119-29,（Retrieved, October 3, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Essays_and_Treatises_on_several_subjects/QLRcAAAAcAAJ?hl=en&gbpv=1, Goole Books).

――――, 1777, "Of the Populoussness of Ancient Nations," *Essays, Moral, Political, and Literary*.（田中敏弘訳，2011，「古代諸国民の人口について」『道徳・政治・文学論集』名古屋大学出版会，306-74。）

池本幸三，1987，『近代奴隷制社会の史的展開――チェサピーク湾ヴァジニア植民地を中心として』ミネルヴァ書房。

伊藤宏之，1996，「植民地主義者としてのジョン・ロック――最近のロック研究への批判的評価（3）」『福島大学教育学部論集 社会科学部門』（61）：11-28。

――――，1995，「市民社会論と近代的植民地主義」『行政社会論集』9（3, 4）：61-91。

Kant, Immanuel, 1775, "Von den verschiedenen Racen der Menschen."（福田喜一郎訳，2001，「さまざまな人種」『カント全集 3』岩波書店，394-415。）

――――, 1795, *Zum ewigen Frieden: Ein philosophischer Entwurf*.（遠山義孝訳，2000，「永遠平のために」『カント全集 14』岩波書店，247-315。）

Kid, Colin, 2006, *The Forging of Races: Race and Scripture in the Protestant Atlantic World, 1600-2000*, New York: Cambridge University Press.

菊池雄大，2020，「近世ドイツと大西洋経済――消費史アプローチからの序説的考察」『商学論纂』中央大学，61（5-6）：27-65。

小林和夫，2009，「ウィリアムズ・テーゼと奴隷貿易研究」『パブリック・ヒストリー』大阪大学西洋史学会，（6）：112-25。

Linné Carl (Linnaeus, Carolus), 1758, 10th ed., *Systema naturae, sive regna tria naturae systematice proposita per classes, ordines, genera, & species*, Lugduni Batavorum: Apud Theodore

Haak: Ex Typographia Joannis Wilhelmi de Groot, (Retrieved October 3, 2023, https://books.google.com/books/download/Systema_naturae_per_regna_tria_naturae_s.pdf?id=E20ZAAAAYAAJ&output=pdf, Google Books).

Locke, John, 1690, *Two Treatises of Government*.（加藤節訳，2010，『完訳統治二論』岩波書店。）

Mason, John Hope, and Robert Walker trans. and eds., 1992, *Diderot Political Writings*, Cambridge: Cambridge University Press.

Maupertuis, Pierre-Louis Moreau de, 1745, "Vénus physique," Patrick Tort ed., 1980, *Vénus physique: suivi de la lettre sur le progrès des sciences*, Paris: Aubier-Montaigne, 75–146.

Meckel, Johan Friedrich, 1755, "Sur la diversité de couleur dans la substance médullaire du cerveau des nègres," *Histoire naturelle, générale et particulière*, 97–102, (Retrieved August 17, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Histoire_de_l_Academie_Royale_des_Scienc/bp7jlrZDNcAC?hl=en&gbpv=1, Google Books).

———, 1757, "Nouvelles observations sur l'epiderme et le cerveau des Nègres," *Mémoires de l'Académie Royale des Sciences et Belles-Lettres. Classe de philosophie expérimentale*, (13): 61–71, (Retrieved August 16, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Histoire_de_l_Acad%C3%A9mie_Royale_des_Scien/a31YAAAAcAAJ?hl=en&gbpv=1, Google Books).

Meillassoux, Claude,1986, *Anthropologie de l'esclavage: Le ventre de fer et d'argent*, Paris: Presses universitaires de France.

Michel, Aurelia, 2020, *Un monde en negre et blanc enquete historique sur l'ordre racial*, Paris: Éditions du Seuil.（児玉しおり訳，2021，『黒人と白人の世界史――「人種」はいかにつくられてきたか』明石書店。）

Montesquieu, Charles-Louis de, 1748, *De l'esprit des lois*.（井上堯裕訳，2016，『法の精神』中央公論社。）

森貴史，2015，「カンパーの顔面角からナチスの人種論へ」浜本隆志編著『欧米社会の集団妄想とカルト集団』明石書店，243–66。

村上泰亮，1992，『反古典の政治経済学　上――進歩史観の黄昏』中央公論社。

永見文雄，2018，『人文研ブックレット――ルソーは植民地の現実を知っていたのか』中央大学人文科学研究所。

岡崎勝世，2005，「リンネの人間論――ホモ・サピエンスと穴居人（ホモ・トログロデュッテス）」『埼玉大学紀要 教養学部』41（2）：1–63。

Painter, Nell Irvin, 2020, *The History of White People*, New York, London: W. W. Norton & Company.

Pogliano, Claudio, 2020, *Brain and Race: A History of Cerebral Anthropology*, Leiden, Boston: Brill.

Rousseau, Jean-Jacques, 1755, *Discours sur l'origine les fondements de l'inégalité parmi les hommes*.（小林善彦訳，2005，「人間不平等起源論」『人間不平等起源論　社会契約論』中央公論社，21–198。）

———, 1762, *Emile ou, de l'éducation*.（樋口謹一訳，1986，『エミール』白水社。）

———, 1762, *Du contrat social ou principes du droit politique*.（井上幸訳，2005，「社会契約論」『人間不平等起源論　社会契約論』中央公論社，199–411。）

Said, Edward, [1978] 2003, *Orientalism*, London: Penguin Books.
坂井建，2014，『図説　人体イメージの変遷』岩波書店。
清水忠重，1978，「サミュエル・スタンホープ・スミス――『試論』にみられる人種観について」『論集』神戸女学院大学，25（1）：91-113。
Siebinger, Londa L., 1993, *Nature's Body: Gender in the Making of Modern Science*, Boston: Beacon Press.（小川眞理子・財部香枝訳，1996，『女を弄ぶ博物学――リンネはなぜ乳房にこだわったのか』工作社。）
SlaveVoyages, 2021, "Trans-Atlantic Slave Trade–Estimates,"（Retrived October 1, 2023, https://www.slavevoyages.org/assessment/estimates）.
Smith, Samuel Stanhope, 1787, *Essay on the Causes of Variety of Complexion and Figure in the Human Species*, Philadelphia: Robert Aitken,（Retrieved, October 6, 2023, https://archive.org/details/b32886573, Internet Archive）.
Sombart, Werner, [1912] 1922, *Liebe, Luxus und Kapitalismus: Ober die Entstehung der modernen Welt aus dem Geist der Verschwendung*.（金森誠也訳，1969，『恋愛とぜいたくと資本主義』至誠堂。）
Sömmerring, Samuel Thomas von, 1784, *Über die körperliche Verschiedenheit des Negers vom Europäer*. Reprinted in: Robert Bernasconi, 2001, ed., *Concept of Race in the Eighteenth Century Volume 8*, London, New York: Thomens Press, unpaged.
Staub, Ervin, 1990, "Moral Exclusion, Personal Goal Theory, and Extreme Destructiveness," *Journal of Social Issues*, 46（1）: 47-64.
高田紘二，1994，「ジョン・ロックと奴隷制にかんする諸問題」『研究季報』奈良県立商科大学，4（4）：23-32。
――――，1995，「ジョン・ロックと奴隷制にかんする諸問題（続）」『研究季報』奈良県立商科大学，5（4）：11-8。
Voltaire, 1756, *Essai sur les Moeurs et l'esprit de nations*.（安斎和雄訳，1989，『歴史哲学「諸国民の風俗と精神について」序論』法政大学出版局。）
White, Charles, 1799, *An Account of the Regular Gradation in Man,* London: C. Dilly, in the Poultry,（Retrieved August 24, 2023, https://archive.org/details/b24924507, Internet Archive）.
Williams, Eric, 1944, *Capitalism and Slavery*, Chapel Hill: The University of North Carolina.（中山毅訳，2020，『資本主義と奴隷制』筑摩書房。）
Winckelmann, Johann Joachim, 1755, *Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Malerei und BildhauerKunst*.（沢柳大五郎訳，1976，『ギリシア美術摸倣論』座右宝刊行会。）
――――, 1764, *Geschichte der Kunst des Alterthums*.（中山典夫訳，2001，『古代美術史』中央公論美術出版。）
弓削尚子，2011，「『コーカソイド』概念の誕生――ドイツ啓蒙期におけるブルーメンバッハの『人種』とジェンダー」『お茶の水史学』（55）：1-32。

＊本稿は，2020 年度東京経済大学個人研究助成費（研究番号 22-29）に基づく研究成果の一部である。